

## 「清めのための洗礼」

今日の個所において、洗礼者ヨハネの弟子たちが問題にしていたのは、洗礼を「誰がすれば問題ないのか、誰がすれば問題となるのか」という問題でありました。その問題に対してヨハネは、自分とイエス様との関係を花嫁と花婿の介添え人にたとえています。ここで花婿にたとえられているのはイエス様のことでしょう。そして、イエス様に愛されイエス様に仕えることになる人々、キリスト者を花嫁にたとえています。信仰に入ることを結婚にたとえ、その信仰に導く役を自分を担ったのだ、花嫁や花婿よりも介添え人である自分が目立つわけにはいかない、あなたがたがイエス様に結ばれて、イエス様を信じるのが何よりも大切なのだ、そのようにヨハネは一步引いた立場で弟子たちに語ります。

私たちキリスト者からすれば、イエス様が行うことには何の問題も感じないと思います。それはイエス様が神の子であり子なる神であることを理解しているからなのですが、しかし洗礼はイエス様だけの特別な業だという訳でもありません。イエス様の大宣教命令の言葉、「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしてください。彼らに父と子と聖霊のみ名によって洗礼（バプテスマ）を授けなさい。」という言葉に示されているように、少なくともイエス様の弟子たちには許された行為でありました。そして今、少なくとも日本基督教団においては、正教師としての按手礼を受けた全ての牧師にもゆるされている事であります。

これは、ヨハネの手紙Ⅰの2章に示されているように、私たちは洗礼によって浄められたこの人生において、「聖別された」この命において、肉ではなく霊に従い、この世の理ではなく神様の御心に従うことが求められています。「聖別された」というと少し大仰に聞こえますが、その為に心掛けることは、それほど複雑なことではありません。必要なことは、「御子の内にとどまりなさい」と勧められるように、いつもイエス様の言葉によって何かを判断する、ただそれだけでいいのです。「イエス様だったらそうしただろう」、そう考えながら生き続ける、そしてそれを突き詰めていったその先に、「この素晴らしい業は私の手柄などではなく、イエス様が行ってくれた業だ」と思い至るそのことによって、私たちはいつか天に召されたその時に、神様の前で恥じることなく堂々と立ち、神様も私たちの人生を見て喜んでくれる、そんな未来が待っているのです。だからこそ、洗礼という業も、牧師の特別な仕事などではなく、そこに確かにイエス様の手が臨んでいる、その確信と聖霊の力によって実現される、神様の御業に他ならないのです。

洗礼によって浄められ、信仰を歩むという事は、神様の力をこの世に示す、素晴らしい業であります。皆様一人一人が、その素晴らしい業を、この地に実現することが出来るのです。神様に浄められ祝されたこの人生を、これからも共に進めていきましょう。

今日の説教箇所：ヨハネによる福音書 3 章 22～36 節

- 22:その後、イエスは弟子たちとユダヤ地方に行って、そこに一緒に滞在し、洗礼(バプテスマ)を授けておられた。また、ヨハネもサリムに近いアイノシで洗礼(バプテスマ)を授けていた。そこは水が豊かだったからである。人々は来て、洗礼(バプテスマ)を受けていた。ヨハネはまだ投獄されていなかったのである。折しも、ヨハネの弟子のある者たちと、あるユダヤ人との間で、清めのことで論争が起こった。弟子たちはヨハネのもとに来て言った。「先生、ヨルダン川の向こう側であなたと一緒にいた人、あなたが証しされたあの人が、洗礼(バプテスマ)を授けています。みんながあの人の方へ行っています。」ヨハネは答えて言った。「人は、天から与えられなければ、何も受けることはできない。『私はメシアではなく、あの方の前に遣わされた者だ』と私が言ったことを、まさにあなたがたが証ししてくれる。花嫁を迎えるのは花婿だ。花婿の介添え人は立って耳を傾け、花婿の声を聞いて大いに喜ぶ。だから、私は喜びで満たされている。あの方は必ず栄え、私は衰える。」
- 31:上から来られる方は、すべてのものの上におられる。地から出る者は地に属し、地に属する者として語る。天から来られる方は、すべてのものの上におられる。この方は、見たこと、聞いたことを証しされるが、誰もその証しを受け入れない。その証しを受け入れる者は、神が真実であることを確かに認めたのである。神がお遣わしになった方は、神の言葉を語られる。神が霊を限りなくお与えになるからである。御父は御子を愛して、その手にすべてを委ねられた。御子を信じる人は永遠の命を得る。しかし、御子に従わない者は、命を見ることがないばかりか、神の怒りがその上にとどまる。